
嵐神の炎

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嵐神の炎

【Nコード】

N9085S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

嵐神は炎を己の助手にした。そして炎は最後に嵐神を。ワーグナーのニールベングの指輪のヴォータンとローゲのお話です。物語やライトモチーフを参考にしました。

第一章

嵐神の炎

「炎よ」

片目の男がいた。右目がなく唾の広い帽子でその右目のところを隠している。黒い服にマントを羽織りだ。白く長い髭と髪を生やした鼻の高い老人だった。その右手には槍がある。

彼はだ。目の前に燃え盛る炎に対して語っていた。

「聞こえているな」

「私を呼んだのは誰か」

炎のところから声がしてきた。

「誰なのか」

「私だ」

男はこう炎に答えた。

「私だ」

「ヴォータンですか」

炎は彼の姿を認めて言ってきた。

「貴方がですか」

「そうだ。私は今知恵を欲している」

「知恵を」

「そなたは知恵を持っているな」

炎を見ながら彼に問う。自分の前一面に燃え盛るその紅蓮の炎をだ。生き物の様に燃え盛るそれはだ。壁にも見えるまでに高く燃えてもいる。

その炎を見ながらだ。彼は言うのだった。顔を赤く照らされながら。

「この世を照らす光を」

「照らすかどうかはわかりませんが」

「うむ」

「今貴方は炎を手にしてはおられない」
炎はこうヴォータンに告げてきた。
「それは確かですね」
「そなたを誰も手にしてはいない」
これがヴォータンの炎への返答だった。
「そうだな」
「確かに。その通りです」
「しかしだ」
ヴォータンは槍で炎を指し示した。そのうえでの言葉だった。
「私は今からそなたの知恵を借りる」
「私の知恵を」
「全てを照らし熱し焼く。その知恵をだ」
「そしてこの世を治められるのですか」
「この世は神々が治めるものだ」
「光の精達がですね」
「そうだ。そして炎よ」
また炎に語りかけた。
「そなたもまた神になるのだ」
「ふむ。私が」
「神になるのだ」
再度炎に告げた。
「そうしてそのうえでだ」
「そのうえで」
「知恵を貸すのだ。私にだ」
「今この世は誰も治める者がいません」
炎からも言ってきたのであった。
「そう、誰もです」
「そして秩序がない」
「人間達も生まれたばかり。それでは」
「治めるのは神々だ」

あくまで自分達だというのだ。そしてだ。

彼は槍をさらに前に突き出した。右手だけで持ったままだ。

そのうえでその穂先を炎に触れさせると。炎は変わった。

赤い燃え盛るような服を着た赤い髪の男になった。やや吊り上がった赤い目をしていて顔は細い。やはり鼻が高く何処か皮肉な笑みを浮かべている。

そうした姿になってだ。そのうえでヴォータンに言ってきたのだ。つた。

「さて、それではです」

「それではか」

「私は貴方に知恵を貸せばいいのですね」

「そうしてくれるな」

「はい。ただ」

ここぞだ。男はこうも言った。

「私にはまだ名前がありません」

「名前がか」

「炎、強いて言えばそれが名前ですが」

「そうだな。それならばだ」

「はい、それでは私の名前は」

「ローゲか」

ヴォータンはここでこの名前を出したのだった。

第二章

「この名前でどうか」

「ローゲ、炎ですね」

「嵐の神が炎の神を名付けた」

「ここで彼は言った。

「それでどうか」

「いい名前ですね」

ローゲと名付けられた男はここでその笑みをさらに深くさせた。
そのうえで、であった。

その笑みでだ。こう言うのだった。

「ではその名前でこれからは」

「知恵を与えてくれるな」

「是非。ただ」

「ただ。何だ」

「若し人間達がです。今はまだ生まれたばかりの彼等が」

「あの者達がどうかしたのか」

「彼等が今以上に大きくなりこの世を治められるようになれば」
その時を仮定するのだった。

「その時はです」

「どうするというのだ、その時は」

「私は炎に戻らせてもらいます」

そうするというのだった。

「そして彼等を照らし護っていききたいのですが」

「私の下から離れてか」

「はい、その時はです」

こうヴォータンに話すのだった。

「それはいいでしょうか」

「神々がこの世を治めるものだ」

これはヴォータンの中では絶対のことだった。だがローゲはそれを否定している。これが彼には理解できないことだった。しかしたった。

それでもだ。彼はローゲに対して告げた。まずは前置きからだ。

「その様なことはだ」

「有り得ないというのですね」

「そうだ、有り得ない」

実際にこう言ってみせたのだった。

「何があるうとも」

「この世が滅びようとするね」

「そうだ、ない」

ヴォータンはまた言った。

「それはない」

「神々が滅んでもですね」

ローゲの今の言葉にだ。ヴォータンの左目がぴくりと動いた。そのない右目も同じだった。微かにであるがそれでも動いたのだった。そしてそのうえでだ。またローゲに応えた。

「知っているのか」

「はい」

ローゲは穏やかな声でヴォータンに答えた。

「この世の運命を。エルダから伝えられました」

「そうだったのか」

「それをもたらすのは何者か」

ローゲはこのことも話してきた。

「それを常に考えておられますね」

「おそらくはだ」

ヴォータンはその左目を動かしながら述べた。

「巨人、若しくはニールベングだ」

「巨人か小人ですね」

「あの者達は常に我々に敵意を持っている」

「そしてとって代わろうとしている」

「だからだ。どちらかだ」

「そうですね。どちらも脅威です」

ローゲはここでは神々の側に立って述べてみせた。ここであえてそうしてだ。あたゆることについて考えようというのであった。

「巨人達は力を持ち」

「ニーベルングは知恵を持っている」

「ならばですね」

また言うローゲだった。

「それへの備えもしなければ」

「備えか」

「どうやらその備えを配するのに私が必要ですね」

ローゲはヴォータンのところに一步出た。そのうえでまた話した。

「それではです」

「来てくれるのだな」

「人が神々の手から離れ彼等だけで生きられるようになるその時まで」

そうすると答えてだ。ローゲは神の一員になった。それから長い年月が経った。

それからだ。備えは築かれた。神々はヴァルハラを築いた。ローゲもその中に入った。

だがある日だ。彼はヴァルハラをくぐった。そして何処かに向かおうとしたのだ。

第三章

その彼の前にヴォータンが来た。そのうえで彼に問うた。

「何処に行くつもりだ」

「何処とは？」

「そうだ、何処に行くつもりだ」

咎めるような顔になってだ。ローゲに問うのだった。

「一体何処に行くつもりだ」

「時が来ました」

こう話すのだった。

「ですから」

「去るというのか」

「はい、人の世がはじまろうとしています」

「人の世が、か」

「貴方は人との間に子をもうけられましたね」

ヴォータンを見ながらそのうえで話す。

「そうですね」

「知っていたのか」

「炎は何処にでもあるものですから」

己が司るそれはこのだ。彼も炎の化身なのだ。

「ですから」

「だからか」

「その子供達、ヴェルズングの一族がです」

「……………」

「貴方はわかっていてそうされましたね」

「そう思っのか」

「私はそう見ています」

その赤い両目でヴォータンの左目を見ながらだ。そのうえでの言葉だった。

「あくまで私がそう見ているだけです」

「そうだというのだな」

「はい、神々の中で貴方と私」

まずは彼等だというのだ。

「そしてエルダ。地の底にいるあの女神の三人だけが神々の運命を知っています」

「神々がこの世を永遠に治めるということをだな」

「おやおや」

ローゲはヴォータンの今の言葉に拍子抜けしたように笑ってだ。そして言うのであった。

「そう仰いますか」

「違うというのか」

「まあそう言われるのならいいですが」

「そしてそのヴェルズングの者達がか」

ヴォータンはローゲに問い返した。こうだ。

「何かをするというのだな」

「人がこの世を治めるはじまりを築かれます」

「そうなるというのか」

「おそらくは。そしてです」

「そしてか」

「その時に神々は黄昏を迎えます」

そうなる。ローゲは話した。

「そして貴方はそれを避けようとしながら実は」

「実は、か」

「その黄昏を望んでおられますね」

「黄昏を望む者がいるのか」

「不思議に思われるかも知れません」

その思っている者を見ての言葉だった。

「ですが確かにいます。貴方は人がこの世を治められるべきだとも考えています」

「人にそんなことができるものか」

「さて。神々より満足に治められるかも知れません」

「有り得ないことだな」

「ですが既に動きはじめています」

また言うローゲだった。

「ノルン達の紡ぐ糸は」

「それに従いか」

「私は去ります」

ローゲは穏やかな声でヴォータンに告げた。

そしてだ。恭しく一礼してだった。

彼はヴォータンの前から去った。そして最後にこう告げた。

「また御会いしましょう」

「黄昏の時に」

「はい、その時にまた」

こうヴォータンに告げるのだった。

「御会いしましょう」

「楽しみにしている」

自分でも何故言ったかわからない。だがヴォータンは確かにこう言った。

第四章

そしてだ。そのうえで言ってた。

彼はローゲを見送った。その後姿は次第に小さくなりそのうえで炎となった。こうして彼はヴァルハラから去ったのであった。

それから暫く経ってた。

森の中でだ。小鳥がさえずっていた。

その下には一人の少年がいる。若々しく精悍で覇気に満ちた。その彼に聞こえるようにしてだ。

「この森の奥に」

「森の奥に？」

少年もその言葉に顔を向けた。見れば服も荒々しい。まるで人の世にいなかったようにだ。

「この森の奥に何が」

「岩山がある」

こうさえずる小鳥だった。

「そしてその岩山は炎に囲まれ」

「炎に」

「そしてそれを乗り越えた時」

小鳥の言葉は続く。

「そこに女がいる」

「女？」

「その女を手に入れば」

小鳥はさらにさえずる。

「その者は全てを得られる」

「女とは何だ？」

少年はそこからいぶかしむのだった。

「何だ、それは」

「行けばわかる」

小鳥はその少年に対して今度はこう言うのだった。

「岩山に行けば」

「そうなんだ」

少年はとりあえずは小鳥の言葉を聞いて頷いた。そうしてだった。そのうえでだ。彼はその岩山に向かうのだった。小鳥は木の枝のところに止まっているだけだった。

しかしここにだ。旅人の姿の彼が来た。そしてだった。

「そこにいたのか」

「はい」

「どういっつもりだ」

彼はだ。小鳥を見上げながら言った。

「何故ジークフリートに教えた」

「貴方の望みを適えただけです」

「私のか」

「はい、貴方のです」

小鳥はローゲの声を出していた。そのうえでの言葉だった。

「貴方の望みを適えただけなのです」

「やはり知っているか」

「勿論。だからこそ」

声は笑っていた。小鳥はヴォータンを見下ろしながら話す。

「こうしてです」

「ジークフリートを行かせたのか」

「あの者がですね」

また言う小鳥だった。

「あの者こそがブリュンヒルデを手に入れ。そして」

「言っつもりはない」

「言わないというのですか」

「言う必要があるのか」

「いえ」

笑顔の声でそれは否定する小鳥だった。

「それはありませんがね」

「そういうことだな」

「では貴方はこれからどうされますか？」

「どうするか、か」

「はい。行かれますね」

こう小鳥に対して述べた。

「そしてそのうえで」

「そこまでわかつているのだな」

「長い付き合いでしたから」

小鳥の声はここでも笑っていた。

「ですから」

「それでか」

「はい、貴方も私のことをよく御存知なのと同じです」

「それとか」

「そういうことです。それなら」

「うむ」

「また会いましょう」

小鳥の言葉は今度は恭しいものになった。敬意は確かにある。

第五章

「そして次に御会いするその時が」

「最後だな」

「それで宜しいですね」

小鳥はこうヴォータンに問うてきた。

「貴方は。それで」

「それでいい」

確かにそうだとだ。彼は言うのだった。

「思えばその為だったのだな」

「あの時私を御呼びしたのはですか」

「そうだったのかもな」

こんなことを言うのであった。

「それでだ」

「そうした考えはわかりませんでした」

「それではだ」

「はい、それでは」

「また会おう」

こう小鳥に告げてだった。ヴォータンは踵を返して森の中に消えたのだった。

小鳥はその後姿を暫く見送っていた。だが彼が消えて暫くしてからだ。何処かへと消えたのだった。後には森のせせらぎだけが残った。

少年は美女と巡り合い、旅の末殺された。そしてその身体が焼かれ美女もその炎の中に身を投じた。その炎こそがだった。

美女はだ。炎をこう呼んだ。

「ローゲよ」

こう呼んでだ。そのうえで炎の中に飛び込みだ。消えたのであった。

だが炎はそのまま燃え上がっていき天界に昇る。その時に天界を脅かさんとするニールベルングの軍勢を焼きそして遂には。

ヴアルハラに迫った。神々はそれを見て逃げようとする。

だが主の座にいるヴォータンはその座に座ったまま動かない。既にその前には薪がうず高く積まれてもさえたのだった。

炎がその薪に迫る。そしてだった。

ヴォータンはその炎に語り掛けるのだった。玉座に座ったまま。

「来たな」

「はい」

炎の中からローゲが出て来た。そうして彼の言葉に応えたのだった。

「お別れの時が来ました」

「そうだな」

「御聞きますが」

ローゲは畏まった態度でヴォータンに問うた。

「宜しいですね、本当に」

「何がだ」

「貴方を焼き尽くします」

こうヴォータンに告げるのだった。

「これから。それで宜しいですね」

「その為に来たのではないのか」

今度はヴォータンがローゲに問うた。

「そうではないのか」

「それはその通りです」

ローゲもこのことは否定しなかった。その通りだというのだ。

「ですが」

「しかし、か」

「他の神々はともかく貴方は」

「私だけは違うというのか」

「この手で焼くには忍びないものがあります」

ここでローゲは明らかに躊躇いを見せていた。そのうえでの言葉だった。

「長い付き合いでしたから」

「愛着を持ったか」

「はい」

ヴォータンの言葉にこくりと頷いてみせた。

「その通りです」

「炎である貴様がか」

「心がありますので」

「だからなのか」

「そういうことです。ここから去られては」

こうヴォータンに提案したのだった。

「そうされては。そして何処かで一人過ごされては」

「さすらい人としてか」

「それはどうでしょうか」

これがヴォータンへの言葉だった。

「如何でしょうか」

「それはいい」

「いいのですか」

「そうだ、いい」

これがヴォータンの返答だった。

「構わない」

「そうなのですか、本当に」

「それが運命なのだからな」

「既にノルン達の系は切れています」

「神々の運命が決まったということだな」

「はい」

ローゲはまたヴォータンに答えた。

「そういうことになります」

「では私はだ」

ヴォータンは話すのだった。

「その運命の中に消える」

「そうされるのですね」

「そうだ、そしてだ」

「そしてですか」

「御前は炎に戻るのだ」

ローゲに対しても話した。

「そうするのだ」

「そして人間達を見守る」

「そうするのが御前の運命だからな」

「それに従えと」

「そういうことだ。いいな」

ローゲに対して告げた。

「ではだ」

「私の役目を果たせと」

「そうするのだ。今からな」

「わかりました」

ローゲも遂にだ。ヴォータンの考えを受けた。

そうしてそのうえでだ。炎の中に消えてだ。薪を燃やしヴァルハラを覆ってしまった。

ヴォータンはその中に消えた。何一つ残らなかった。

炎は彼もヴァルハラも焼き尽くしたうえで何処かに消えた。そしてそのうえでだ。人の傍にいたのだった。それは今も変わることがない。

雷神の炎 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9085s/>

嵐神の炎

2011年5月1日22時25分発行